研究論文

関西大学図書館所蔵 伝藤原為家筆『拾遺和歌集』について

片　桐　洋　一

一、書誌の概要

関西大学図書館所蔵、鎌倉時代書写の『拾遺和歌集』（函架番号C911.2353）は縦19.4cm、横19.3cmの桐箱に入っているが，その蓋の裏に貼紙して，

拾遺和謌集　六半本
中院為家卿　墨附百廿五枚
弘化丁未　初冬
古昔菴　好斎　（印）

とあるのは、弘化４年（1847）の大倉好斎の極め書きである。他に折紙、極札の類はない。

ただし、本文の筆跡は為家の真筆である冷泉家時雨亭文庫所蔵の『続後撰和歌集』とは明らかに異筆であるが、古筆家の言う為家筆、たとえば伝為家筆「野路切（古今和歌集）」などに特に近い闊達な筆跡で書かれていて、鎌倉時代中期の書写になることは疑いもない。

さて、該本の本体は縦17.5cm、横16.5cmの列帖装（綴葉装ともいう）の１冊であるが、『拾遺和歌集』（以下、通称の『拾遺集』を用いる）全20巻を上下２帖に分けた本の上帖に相当し、下帖を散佚している残欠本である。加えて後述するように、２丁ずつ２箇所、計４丁の落丁がある。

表紙は薄縹色・草色・萌葱色・雄黄色・朱色など９色に宝相華瑞祥文を織り込んだ桃山時代の製作を思わせる緞子包表紙。江戸時代ごく初期の改装時に附されたものと思われる。題簽はない。また見返しは鳥の子紙に金銀泥で庭前梅樹（前）と海辺葦千鳥（後）を描く。

本文の料紙は斐楮混漉き。前表紙の後、薄手鳥の子１枚を遊紙として後補した後、一面10行、和歌2行書きの墨付第１丁表（オモテ）となる（以下、表オモテはオ、裏ウラはウと略記する）。１オから始まる列帖装の第１括は８枚を二つに折った16丁（１オ～16ウ）であるが、この後に表紙の端が出ていて、ここに本来存した２丁（夏83番の和歌から95番歌の上句まで）を落丁している。他の多くの括と同じように、この第１括も本来は10枚を二つに折った20丁であったが、改装前の元表紙と遊紙に相当する２丁に連続していた第一括の外側の２丁が脱落してしまったと推定されるのである。事実、第2括（17オ～36ウ）、第３括（37オ～56ウ）、第4括（57オ～76ウ）は10枚を二つに折って20丁としており、第５括だけは９枚を二つに折って18丁（77オ～9丁ウ）としているが、

落丁部分１（16ウ～17オ）

第6括は再び10枚を二つに折って20丁（95オ～114ウ）としているのである。

最終の第7括は8枚を二つに折って16丁としているが、始めの115オと第6括の最終丁（114ウ）との間には後表紙の端が出ており、そこの見開き2丁分（雑下・571番の長歌の途中から572番の途中まで）と、それに連続していたはずの最終丁の遊紙2丁分を落丁しているので、現状は12丁（115オ～126ウ）となっている。

なお、墨附きは大倉好斎の極め書きのように、現在も125丁である。好斎が見た時は既に現状と同じ形になっていたということである。

以上のように該本には2丁分2箇所、計4丁の落丁があることがわかったのだが、落丁以外にも本文書写に問題がないわけではない。

まず54ウの左半分に書写されている賀部290番歌を、字配りそのままに掲げると（濁点と句読点は私に附した）、

小野宮太政大臣いへにて、子日し侍
けるに、下らうに侍ける時、よみ侍ける
三條太政大臣　廉義公
ゆくすゑもねのびのまつのためしには
君がちとせをひかむとぞおもふ

とあるのだが、次の55オの第1行と第2行にもまた、

ゆくすゑもねのびのまつのためしには
君がちとせをひかむとぞおもふ

と書いた上で、削除符号を加え、削除すべきことを指示している。該本の書写が54ウ以前と55オ以後を分離してなされたために、合綴するまでは重複に気づかなかったせいであろう。

なお、該本の書写の特徴として注目すべきは、「拾遺和謌集巻第一」「拾遺和謌集巻第二」「拾遺和謌集巻第三」～とある各巻の端作りがすべて丁のオモテ（奇数頁）から始められているという事実である。たとえば、巻一・春の場合、最終歌は15オの3行目で終って余白が7行もあるのに、続く15ウを白紙のままにして、16オから巻二・夏を始めているし、その巻二・夏が24オの6行目で終っているのに、24ウを空白にして、25オから巻三・秋を始めているというように、各巻の冒頭は必ず丁のオモテ（奇数頁）から始めているのである。これは、冷泉家時雨亭文庫所蔵の『隠岐本新古今和歌集』が各巻を丁のウラ（偶数頁）から始まるように揃えているのにも通じる由緒ある書写方式であって、該本が、古い時代に、きわめて由緒ある本、権威ある本として製作せられたことを暗示している。

二、本文の実態とその性格

現在、『拾遺集』の研究において一般に用いられている本文は、『新編国歌大観』や『新　日本古典文学大系』の底本になっている京都大学附属図書館所蔵中院通茂筆本であるが、これは冷泉家相伝の天福元年（1233）書写藤原定家自筆本を、中院通茂が後西上皇の命によって延宝5年（1677）8月に忠実に書写した本である。しかし近年その原本である冷

	国歌大観番号	関　大　本	天福元年定家筆本
①	45	御屏風に	御屏風
②	126	西宮左大臣家屏風に	西宮左大臣の家の屏風に
③	301	まかりける人に	まかりける人の
④	384	(作者名ナシ)	すけみ
⑤	404	などてなるらん	などてなりけん
⑥	428	恵慶法師　一本ニナシ	恵慶法師(書入補入)
⑦	450	めにもみえねば	めにし見えねば
⑧	470	わすられ（以下空白）	わするなよほどは雲ゐに成ぬともそら行月の廻あふまで
⑨	583	ねるはたがこぞ	ねるやたがこぞ
⑩	594	神さびわたる	神さびにたる

泉家旧蔵の天福元年定家自筆本が影印本として刊行[注1]された。したがって、ここでは、この定家自筆本と比較しつつ該本の本文の性格を見てゆきたい。

関西大学図書館所蔵　伝為家筆『拾遺和歌集』（上帖）の本文が、概括的に言えば、定家書写本の系統に属することは、拙著『拾遺和歌集の研究　校本篇　伝本研究篇[注2]』の「校本篇」と対照すれば一目瞭然である。したがって、問題は、該本が定家書写本系統の中でどのように位置づけられるかという点にある。天福元年定家自筆本の本文と比較しようとする所以である。

前頁の表には、該本の本文が天福元年定家筆本と異なる場合を10例掲げたが、まず問題になるのは、⑥428の作者名「恵慶法師」である。前述した影印本を見ても、天福元年定家自筆本はこの「恵慶法師」を後になって書き入れていることは明らかである。ということは、該本の「恵慶法師 一本ニナシ」の「一本」はこの定家自筆天福元年本が「恵慶法師」と書き入れる前の本に近いものであったことを物語っているのである。

それに対して、④の384番歌の作者名は該本に存しないが、定家自筆本には「すけみ」とあって、藤原輔相の歌であることを示している。該本もしくはその祖本の脱落と見るべきであろう。

その他の例のうち、名詞に添える格助詞の「に」「の」などの添加・省略に属する①②を除く8例について見ると、③の301番歌の詞書を「まかりける人の」（定家筆本）ではなく「まかりける人に」とするのは、京都大学図書館所蔵冷泉為満奥書貞応二年本、宮内庁書陵部所蔵東常縁筆本、尊経閣文庫所蔵伝浄弁筆本、京都大学図書館所蔵二条為重奥書本、早稲田大学図書館所蔵甘露寺親長筆本、陽明文庫所蔵近衛基熙筆本、片桐洋一所蔵冷泉為秀奥書本、大阪青山短期大学所蔵算合本、山岸徳平氏旧蔵寂恵筆本など多くあり、⑤の404番歌の「などてなりけん」（定家筆本）を「などてなるらん」とするのは、前掲陽明文庫本、伝浄弁筆本、岩国徴古館所蔵吉川家本、また⑦の450番歌の「めにし見えねば」（定家筆本）を「めにもみえねば」としているのは、冷泉爲満筆貞応二年本、二条爲重奥書本、甘露寺親長筆本、近衛基熙筆本、冷泉爲秀奥書本であり、さらに⑨の583番歌の「ねるやたがこぞ」（定家筆本）を「ねるはたがこぞ」としている本には為重本があり、⑩の594番歌の「神さびにたる」（定家筆本）を「神さびわたる」とする本には為秀奥書本があるというように、何故か第2句以下を全く記していない⑧の470番歌の場合を除いては、関大本の本文の特徴は、関大本だけのものではなく、天福元年定家自筆本ではない定家本系本文の特徴を思わせるものなのである。

本文ではないが、これに関連して贅言を加えれば、各歌に朱筆で加えられている勘物や集付が天福元年定家自筆本のそれとかなりの違いがある。たとえば、該本では秋・208番歌に「此哥在後撰秋下読人不知」という朱筆書入があるが、定家自筆本にはないし、冬・228番歌には「此哥在後撰冬部」という朱筆書入があるが、定家自筆本は「後撰」という集付けだけであるし、同じく冬・238番歌には「此哥在秋部」と注して『拾遺集』内部における重出を示しているのも、物名・371番歌に「抄雑上」という集付けの間に「古今」と注して『古今集』の墨滅歌にあることを示している勘物も、定家自筆本にはない。このような集付や勘物がどの時点で加えられたかわからないが、少なくとも定家自筆天福元年本になかった新しい注記であることは確かなのである。

三、結論的評価

以上のように、関西大学図書館所蔵『拾遺和歌集』は、上下２帖のうちの１帖だけの残欠本であるに加えて、２箇所に各２丁の落丁もあって、完全な本とは言えないが、鎌倉時代中期の書写にかかる闊達な名筆で書かれていて、１枚ずつを古筆切として評価すればその価値は大なるものがある。またその本文も、現在最も尊重されている天福元年書写定家筆本とは異なった、もう一つの「定家本拾遺集」の本文を伝えている可能性もあって、注目に価するものなのである。

注

（注１）久曽神昇編『藤原定家筆　拾遺和歌集』（東京都　汲古書院　1990年）

（注２）片桐洋一編著『拾遺和歌集の研究　校本篇・伝本研究篇』（京都市　大学堂書店　1980年）

〈1995.11.28受理　かたぎり　よういち　文学部教授〉